

# 児童のアート空間把握 — 中学年の造形遊びを通して —

## Children's Grasp of Art Space Via Zōkei-asobi with Middle Elementary School Students

蝦 名 敦 子\*

Atsuko EBINA\*

### 要 旨

中学年児童は、造形遊びを通してアート空間全体を統一的に造形化するまでには至らない。俯瞰視よりも目の前で材料を重ねたり、組み合わせて何かに見立てながら作ることに、興味を示しがちである。組合せをするグループと、全体的に装飾的に表現しようとするグループが混在した形で、活動のなされることが確認された。今後、高学年の造形遊びの改善に当たっては、材料や場所（環境）の検討に加えて、指導上、次の観点からの検討が必要になる。1) 話し合いの場の設定 2) 活動途中での目的の共有化 3) 目的達成に効果的な教材（題材構成）の工夫、である。

**Key words** : 小学校中学年、アート空間把握、造形遊び

### I はじめに

本研究は2011年に整備された弘前大学教育学部附属小学校中庭パティオを巡って、これまでの児童のアートシーンに着目した考察の一環である。今回は、2014年11月に小学校4年生を対象に実践した造形遊びを通して、アート空間（パティオ）<sup>1)</sup>における、彼らの空間把握の実態について注目する。筆者が題材を考案して、直接2クラスに行った授業実践の検証に基づく。

本稿は、造形遊びの材料と場所の問題を通して、アート空間把握のあり方を考察していく。実際に造形遊びをするためには、まず本場所（図1）を使用し、どのような材料を用いるかが問題となる。また4年生は、2年時にも同場所で造形遊びをしているので、材料は異なるが、子どもの成長に沿った空間把握の変化を見ることができる。彼らの成長過程も視野に入れて、同空間の捉え方にいかなる進展があるかについて、併せて検討する。そして、造形遊びが中学年に求める「材料」と「場所」への働きかけ方の問題に関連づけながら、中学年による空間把握の特徴と課題について明らかにしたい。

考察の手順として、1. 造形遊びの題材考案について、2. 造形遊びの実践と結果、3. 中学年の造形遊びにおける材料と場所の問題、4. 2年時の造形遊びとの比較、最後に、その結果から導き出されることになるが、中学年児童によるアート空間把握の特徴と課題について析出する。



(図1) 階上から見たパティオの全貌

\*弘前大学教育学部美術教育講座  
Department of Art Education, Faculty of Education, Hirosaki University

## II 造形遊びの題材考案について

造形遊びの題材を考案するにあたっては、材料の選択や授業の組立てと同時に、まず造形遊びを特徴づける題材名が問題となる。それは授業の導入時に、言葉自体から既に活動全体のイメージが方向付けられるからに他ならない。「何を」するのか―主題（表したいこと）を明示しないで、中学年の造形遊びの主旨―すなわち、材料や場所と関わりながら所定の行為（並べる、つなぐ、積む、組み合わせる、切ってつなぐ、形を変える）<sup>2)</sup>によって、新しい形を生み出す活動であることを、いかに児童に理解させるかが課題となった。

材料には「傘」を選定し、並べたり、つなげたり、組み合わせたりする行為が優先する活動とした。題材名として、Aクラス「パティオにカサがいっぱいあると……」、Bクラス「パティオをカサでデコレーション!!」が考案された。

### (1) 材料・場所の選択について

本来であれば材料との関わりで、場所を自由に選んで展開できるような、造形遊びとなる。しかし今回は先に場所（パティオ）を想定していたため、約100坪弱ある空間を満たす材料の選択が問題となった。そこで着想したのが傘である。児童に持参させることによって数量も確保できるとともに、本場所の空間を量的に満たせると考えた。

### (2) 授業の組立てと題材名について

2時間（90分）授業で行う。最初の1時間で、造形遊びを特徴づける行為である、1.「並べる」、2.

「つなぐ」、3.「積む」を、傘を閉じた棒状のまま一つひとつ行うことにした。そして2時間目には4.傘を開いて自由に活動させる。児童がパティオをどのように使って、いかに造形化するか、に注目する（表1参照）。活動内容は比較的早く決まったが、題材名を一つに絞りきるのに躊躇し、二つの題材名を想定し実践しながら、彼らの反応を見ることにした。

### (3) 導入部で児童に与える授業のイメージ―何をするのか？

題材考案で課題となったのが、最初にこの造形遊びの活動を児童にどのように理解させるか、であった。つまり、造形遊びに慣れていない彼らに対して、その活動の主旨を理解させることが、難しく感じられたのである。そこで題材名から活動のさせ方については、「何を（表したいこと）」ではなく、「いかに」の行為に重点を置く。その上で、学習指導要領（以下、「要領」と略す）中学年に初登場する造形行為「組合せ」についても、「組み合わせる」ことだけを指示したらよいのか、組み合わせ「て」装飾する（もしくはデザインする）ところまでを目的として明示したらよいのか、が課題となった。最初のAクラスでは、傘の量を強調した題材名「パティオにカサがいっぱいあると……」、Bクラスでは、題材名に「飾る」という行為までを含めた「パティオをカサでデコレーション!!」を実施する。

対象児童の4年生は既述のように、小2の時に一度、同場所で造形遊びを経験していた。Aクラスでは、2年時に行った実践を想起させる場面から授業を始め、それを今回は傘を使って行うことを伝えたの

(表1)

授業内容	Aクラス「パティオにカサがいっぱいあると……」 友達同士→自由	Bクラス「パティオをカサでデコレーション!!」 班活動→自由
1時間目導入	○	◎子どもの方から言い当てる
1. 並べる	○	○
2. つなぐ	○	◎「つなぐ」を班から全体へ/上から見る※3
3. 積む	△「くずれないように教師がサポート」	◎「くずれる→自分達でやり直させる」※1
2時間目 4. 造形活動	○固まり→最後に装飾（構成）的に	○固まり（テント製作）と壁の装飾に展開。より広く、複雑に
鑑賞	△最後の5分でやり直す。「形に添って置くときれい。」※2	◎数人の児童が感想を発表
ワークシート	×時間なし	◎
授業展開改善の3つの観点：(1) 話合いの時間の設定※1 (2) 途中で目的の共有化※2 (3) 教材（題材構成）の工夫※3 (×問題, △改善が必要, ○良好, ◎改善点)		

である。題材名の「パティオにカサがいっぱいあると……」の「……」の部分全員に行ってもらい、活動であることを説明する。児童の活動自体はスムーズに進み、その結果この題材名で、特に問題はないと思われた。

次のBクラス「パティオをカサでデコレーション!!」では、授業の始めに題材名を告げずに、逆に質問形式を採り、持参した傘で何をしようかを問いかけた。すると、驚いたことに彼らの方から「デコレーション」、という言葉が返ってきたのである。同時に「飾る」と答えた児童もいて、先に彼らの方から筆者側が考案した、題材名のキーワードが提起されることになった。予想に反して子ども達は材料（傘）と場所だけで、いかなる造形行為をするのかをいち早く察することができたのである。

当初題材名にこだわっていたが、中学年ではいずれの題材名からも造形遊びの活動が、比較的順調に行われることになる。ただ、彼らの活動状況を尊重すれば、自分たちが理解できインパクトのある題材名の方が、積極的に受け入れやすいように思われた。

### Ⅲ 造形遊びの実践と結果

#### — 2クラスの実践を通して

A、Bクラスとも基本的に同じ授業内容であるが、授業の進め方（題材構成）については、始めに行ったAクラスの授業を反省し、指導法や授業の中身を改善しながら、Bクラスで実践する（表1参照）。その主な点は次の3つである。(1) 児童全体で話し合わせ、考えさせる場面の設定（表1 ※1）。(2) 階上から見下ろす場面のタイミング（同※2）。(3) 授業全体の進め方（題材構成）（同※3）。である。この3点を中心に述べていく。

#### (1) 子ども全体で話し合う場面の設定

同じ造形遊びを2回（AクラスとBクラス）、2時間ずつ行うことになるのであるが、2回目（Bクラス）の方が1回目（Aクラス）の反省を踏まえて行ったため、授業のあり方としては数段充実した。1回目は、最初の1時間目で行う1.「並べる」、2.「つなぐ」、3.「積む」の活動について、自然発生的にできた友達のグループ活動で進めた。Bクラスではそれを始めから班活動にして行った。構成員にかかわらず、最初の「並べる」「つなぐ」は、A・Bクラスとも同じような子どもの反応が見られた（図2、3）。ただ

「積む」活動の時には、傘の量が足りないと思われたため、両クラスとも全員に同一行動をとらせ、パティオ円形の最上段で傘を積み上げさせた。Aクラスでは子ども達が積み上げていくと、途中でくずれそうになり筆者が思わず手を貸した。この場面は次のBクラスでは大きく変更され、児童に完全に任せることになる。

実際にBクラスでも案の定くずれたのであるが、筆者は援助しなかった。むしろ積み上げ方をどうすればよいのか。それを課題として、児童に考えさせ発表させてみた。「下を広くする」、「傘を5～6本で組んでいく」、「もっと広い場所でやる」、「最初からよく考える」などの意見が出た。もう一度やり直したいかを尋ねると、元気な声で一斉にやり直したいと言う。そこで筆者が関与せずに一切を任せてみた。すると自発的に皆で相談しながら、しかも一番大きな面積を占める円形の場所に進んで移動し、6本ずつ傘を縦・横に並べながら積み上げていき、安定した形を最初から作っていった。最後には、故意に揺らしてみても全くくずれることなく、子ども同士で相談しながら、実に協力し合ってしっかりと積み上がったのである（図4）。

話し合いの場面を設けることで、自分達で造形活動のあり方を改善できた。これは、要領中学年における「造形遊び」の活動方針「イ みんなで話し合って考えたりしながらつくること」が実現された場面であり、話し合って考える行為が、本事例から有効であることが確認された（表1 ※1）。



(図2) 並べる



(図3) つなぐ



(図4) 崩れた形（左）としっかり積み上がった形（右）

#### (2) 全体を見下ろすタイミング

Aクラスでは2時間目の最後の鑑賞において、2階から見下ろす活動を取り入れることにしたが、そのタイミングが遅すぎたのではないかと、という反省があっ

た。つまり、上から見下ろして全体を見ることを、児童は事前に意識していなかったのである。そこに子どもの造形活動と筆者の想定にズレがあったのも事実である。大人は目の前の造形と、視点を変えて俯瞰した場合の複眼的な視点を、その環境を見ただけで同時に持つことができる。しかし小学校中学年では具体的に意識させないと、当然のことながら目の前の世界に終始する。

実際にAクラスでは、上から見下ろすことを事前に知らせていなかったため、彼らの活動は友達同士で組み合わせて、固まりを作るケースが多かった(図5)。鑑賞時の最後に、全員を上階に連れて行き俯瞰させたのだが、「(もともとあるパティオの)形に沿って(傘を)おくときれいだ」という発言に注目が集まった。それはその場面で、ある児童によって発せられた。その言葉を筆者が拾い上げて全員に問いかけると、一斉に皆で作りを換えようということになり、最後の5分間でパティオの形状に沿って傘を並べ替え、広がりのある装飾的な形ができあがったのである(図6)。(表1※2)



(図5) Aクラスの活動の様子



(図6) Aクラスの最後の形

この全体を見下ろしてみる、というタイミングが遅かったことが、1回目(Aクラス)の授業を終えた時

点における2つめの反省点であった。そこでBクラスでは早めに階上から俯瞰させることにした。棒状の傘で「つなぐ」活動をする1時間目の時に、班活動から全体へとつなげさせることにし、その時点で空間全体を早めに、階上の窓から鑑賞させたのである(図7)。前もって全体感を捉えさせることで、次の2時間目にどのような効果をもたらすのか、を期待を込めて観察する(表1※3)。

### (3) 授業の進め方(題材構成)

1回目(Aクラス)では試行的に行ったため、予定のワークシートを書かせるだけの時間的余裕はなかった。他方Bクラスでは、活動内容を整理し、授業の進め方を改善することによって、ワークシートの作成まで終わることができた。結局、1回目の授業において何を踏襲し何を改善したらよいか、またそれに見合った時間配分が課題となる。問題点が3つ生じた。①Aクラスでは、1時間目の内容が予定より早く進み、無理矢理傘を積み上げようとしたために、無駄な時間を費やした。手助けをしないで、児童に考えさせるようにしたい。②早めに階上から見下ろさせて、造形行為がなされる場所の全体像を掴ませる。③ワークシートによる振り返りの時間がなくなってしまった、である。

それらを次のBクラスでは改善して、授業に臨む。ただしクラスにおいても児童の活動に差があり、その違いが現れている。Bクラスでは題材名を主体的に自分達で言い当てていたせいも、筆者の働きかけに対する反応も良好で、授業者の意図やねらいを先に先に読んでいく傾向があった。

併せてBクラスでは、始めから友達同士ではなく、前半は班ごとの活動にした。基本的な行為としての「並べる」、「つなぐ」をした後、ここでさらに全部の傘をつなげさせ、上から眺めさせたのである。意図的に班から全体の活動へと移行させたのであるが、既存の段差やフォルムを超えて棒状の傘が連結されていたことには、彼らは興味を持ち、この点は効果的に作用したと思われる(図7)。地面に顔を近づけ、視線を低くしてそのつながりを眺めたり、確認する児童もいた。またこの時点で全体の空間感を感じ取り、2時間目には即座に全体的に空間を飾ろうとする、児童も現れた。

だがその前に、「積む」活動は同じように課した。ただし、ここでは手助けをせずにあえて失敗させ、その理由を皆で考えさせてもう一度行わせたことは、

(1) で前述した通りである (図4)。こうして題材構成を改善しながら、次の時間に傘を題材設定の通りに開いて、デコレーションする活動に入ったのである。その結果、Bクラスは一段と活動が早く進み、最後には窓をも使って周囲の壁を装飾する児童も現れた (図8)。周囲の壁にまで装飾の意識が及んだことになる。それはAクラスでは見られなかった行為である。



(図7) 全部の傘がつながる



(図8) Bクラスの最後の形

しかしながら、そこで見えてきた問題点もある。全体を早めに見下ろさせたのであるが、実際に作り出すと、中には目の前の限られた小規模な造形に集中し、テントや部屋という日常的な具体物を想定しながらのものづくりが、次第に主流となっていく。後から判明するが、折角傘を拡げて全体的に並べようとした児童が、2時間目には傘を重ねてテントを作ろうとする子どもによって、勝手に多くの傘を持って行かれてしまったと言う。そのことがよほど悔しかったようで、最後に鑑賞で感想を尋ねた時にも、一人だけ楽しくなかったとその理由を訴えた。当該児童は題材設定にたいがい早く全体的に装飾してみたい、と語っていた子どもでもあり、それが叶わなかったことに対する不満があった。

#### (4) Bクラスのワークシートの検証

回収されたワークシート25名分の中で、一人だけが不満を述べているのがその児童である。それ以外は、

すべて好意的で、1〈テントを作ったグループの意見〉(図9)、2〈かさの裏表を組み合わせて、置き方を工夫したグループの意見〉(図10)、3〈窓(壁)を装飾した意見〉(図11)、4〈傘の意外な活用や全体の意見〉に大別できる。

1では、傘を重ねる工夫をいろいろしたことや、テント・部屋のような具体物が傘を積み上げてできて、よかったという意見、2では、傘の形状から素直に立てる工夫や、ひっくり返して逆さに飾ることの発想に共感する意見、しかも段差を活用するととてもキレイになったとする意見、3では傘がもっとあったらさらに壁を装飾したかった、という意見が盛り込まれている。以下、大別したそれらの意見を2点ずつ紹介する。

#### 1 〈テントを作ったグループの意見〉

- ・仲間といっしょにかんがえてテントができてうれしかったです。
- ・かさでデコレーションをして、とてもいいと思いました。自分のへやみたいなのができて、とてもうれしいです。また、やりたいと思います。

#### 2 〈傘の置き方を工夫したグループの意見〉

- ・今回、パティオでかさをつみ上げたり、つなげたり、ならべたりして、とても楽しかったです。みんなのかさだけで、工夫して、さかさまにしたりして、きれいだなと思いました。
- ・かさを、ぼうじょうにするよりひらいた方が、きれいに見えることが分かった。だんさごとに、表にしたりうらにしたりすると、とてもきれいだなと思いました。

#### 3 〈窓(壁)を装飾した意見〉

- ・窓にかさをならべたり、ぼうとぼうのすきまにかさを入れたりして楽しかったです。もっとかべにかさをならべたいです。きれいに工夫してならべたりしてうれしかったです。
- ・まどにかさをかざったり、すきまにいれたりしてたのしかったです。もっとかさがあたら全部のすきまにかざりたいです。

#### 4 〈傘の意外な活用や全体の意見〉

- ・みんなで置き場所を考え、すてきなデコレーションができて良かったです。
- ・かさが飛ばされないように工夫して作れました。い外にかさでやるのも楽しかったです。みんな、きれいにデコレーションしていてすごいと思いました。またやってみたいです。

### ＜否定的意見1名＞

- ・ほかの人が何も言わずに（傘を）うばって行って楽しくなかった。

ワークシートからは、できた形について、それぞれ傘の意外な表情を見つけて置き方が工夫されたことに、共感する意見が出された。総じて面白く楽しくよいと思った、体験談が述べられている。

造形活動は3つに類型化できる。①傘を積み重ねてテントや部屋など具体物を作っていったグループ（図9）、②傘を表や逆さ（裏）にして置き方を変え、パティオの段差に合わせて置いて新しい空間を作ったグループ（図10）、③窓に差し込んで壁までを装飾したグループ（図11）、である。

総じてBクラスの活動は全体的に充実感があつた。活動内容を精査して、時間配分を考えながら、①子ども達の話合いを取り入れ、②めあてに沿った活動の関連づけを図ることによって、③想定していたワークシートの振り返りまで達成できた。鑑賞の時間もとれ、数人の子どもの感想も時間内に導き出せた。ワー



（図9）Bクラスのテント作り



（図10）傘の置き方を工夫したグループ



（図11）傘で窓を装飾したグループ

クシートを書いて最後に片付けをする余裕もあり、2回目の授業運びが今回の一応の成果である。

2クラスに実践した授業内容はほぼ同じであるが、題材名の提示の仕方（導入）や授業の進め方（題材構成）によって、結果的にその場所の空間把握に違いが生じたことになる。特にBクラスの授業では、先に実践したAクラスの問題点を改善した形で進めることにより、一層広い空間を把握する活動が見られた。ここではパティオの地面上だけではなく、その場所を取り囲む周囲の壁にも児童の造形意識が行き渡り、より広い空間感が捉えられたのである。

## IV 中学年の造形遊びにおける課題

### —材料と場所の問題

結局、子ども達の活動は空間装飾なのか、テントや部屋など具体物を作る方向なのか。今回授業者は最後までその点を迷い、いずれかに方向づけることはしなかったが、教師の関わり方によっては造形遊びの活動も、大きく変わってくるのである。本実践を振り返って(1)材料と場所、(2)子どもの造形遊びの実態、(3)教師の関わり方、(4)造形遊びの今後の課題、の諸観点から考察する。

#### (1) 材料と場所

材料について子どもの発想に任せ活動させるには、傘は構造的に弱いことが判明する。他クラスのものについては勝手に使用させないなど、材料に対する授業者の配慮が足りず、後で破損したケースが出てしまった。大事なものや愛着のあるものは「造形遊び」には向かない。学校に蓄積された廃棄処分をするような傘であればよかつたのである。本実践で改めて強く実感したことは、第一に自分の物以外の傘を自由に使用させたため、中には思い入れがなく材料が即物的に使われる、ということ。そうした子どもがとる行動への配慮である。第二に造形遊びには場所に合わせた、数量が多く必要となること。第三に活動をしながら彼らは新しく体感しようとして、その中に入るなど想像以上の活発な活動をしがちとなる。

中学年の造形遊びは、児童によさや面白さ、楽しさを体感させる活動である。それだけに材料と場所のマッチングが重要味を帯びる。

#### (2) 子どもの造形遊びの実態

中学年は傘を組み合わせ、中に入れるテントや部

屋など具体物を作ろうとした。その方が中学年にはより発想しやすいようであった。しかし生活に密着した目的物を想定し、それを作ることに固執してしまうと、要領低学年で規定された内容や、造形遊びの主旨から離れてしまうのである<sup>3)</sup>。特にBクラスでは全体的に傘をつなげることを早めに体験しても、それを開いて自由に活動する際には、つなげる活動よりも次第に組み合わせて、小規模に重ねる方向に流れていった。しかも一度テントを発想すると、作る目的意識が明確になっていくグループが現れた。すなわち、具体的な物品に見立て、それに近づけて作ろうとするグループが発生していく。同時に周囲を装飾する子どもも現れたが、今回の実践では全体をデコレーションしたいと思う児童と、目の前で傘を組み合わせて、思い付きのテントや部屋を作ろうとするケースが、混在する形で表れた。

### (3) 教師の関わり方—造形遊びの指導法

子どもはパティオ全体をデコレーションするのではないか。これは授業者の予想であり、一部にはそのように活動する児童がいた。その反面、傘を組み合わせて発想し、具体物に見立てて作る方向に進んでいった。彼らに任せただけでは、自分達で話し合って筆者の題材設定に沿った方向に、造形が向かっていかなかったのである。一時間目を実施した、目の前の小スペースで行う「積む」活動では、話し合いで協力が見られたが、広い空間で自由活動になった場合は、ねらいや目的がある程度方向づけられないと、子ども同士ではそれぞれがしたい方向に勝手に進みがちになる。そのねらいを方向づけするかどうかは、造形遊び自体の主旨に関わる点である。授業者の指導の下に、お互いに合意形成がなされていくことによって、造形として全体的に見た時の「よさや美しさ」は達成されうであろう。ただし中学年では、「よさや面白さ」が目指されるべき感覚である点からすれば、中学年らしい行為がその実態として現れたと見なせる。

児童の活動に今回授業者は介入せず、子どもの発想・構想を全体的に方向づけることは、授業ではしなかった。だが、それは教師の関わり方として造形遊びの指導法に、大きな課題となって残る。

### (4) 造形遊びの今後の課題

この授業実践の結果から、今後検討を要する課題としては次の事項が挙げられる。

#### ①造形遊びの授業の進め方：友達同士<班活動から

#### 全体へ

造形遊びの授業の進め方としては、友達同士の自由な結びつきよりも、班ごとからクラス全体の活動へ進む方が効果的である。主題が共有されている共同製作とは異なり、友達同士だと極端に加勢し結びついたりする。造形の方向性が異なる場合は、今回の場合のように対立が生まれやすいからである。

②傘を組み合わせて、固まりとして捉えがち。また、児童は作った形の中に入ろうとし、それを実用物として活用したがる。

こうした課題では、傘のフォルムや材質感も加わって、組み合わせて固まり（テントや部屋）を作ろうとしていた。そして中学年の児童はどんなに小さくてもその中に入ろうとする。これはこの時期の子ども一般がとる、行動の傾向とも言えるものである。そうした彼らの作りたがるフォルムに注意して、最後に作ったものを活用させる方が、4年生児童の実態に適合しているように思えた。

③積み上げるよりも自然につながり出す方が時間がかかる。

自然に材料全体がつながり出すには、積み上げるよりも時間がかかる傾向にある。今回は全体的につなげることを、Aクラスでは授業の最後に児童の言葉から引用して試みさせ、Bクラスでは題材の構成上授業者が指示して行わせた。後者では子ども達は楽しんで試みた。棒状の閉じられた傘で全体をつなげさせた時は、そこにできた形の起点に戻って、全体を眺める児童も数人現れ、つながり方を楽しんでいった。子どもの自由な活動とは言え、教師の指示が効果的に作用した場面でもある。

④子どもの造形の方向性を理解した、教師側の想定→授業運び（題材構成）の検討

今後の造形遊びでは、児童の行為の方向性と教師の意図する授業の方向性が、自然にかみ合うようにしたい。そのためには題材設定やその構成の検討が必須となる。

また、授業を次のように展開することも考えられる。1) 傘を棒状で並べ、つないだ後、そこで傘を開かせる。2) あくまでも子どもの視点に立ち、上から見るのは避ける。長い棒状の傘がパティオ一杯につながった場面（図7）のように、彼らが作った形を子どもの視点で確認させる。3) あるいはまた装飾の方向に一貫させる、などである。同じ題材でも教師（授業者）の造形遊びの捉え方や関わり方によって、様々な展開や方向性が考えられるところである。

今回の造形遊びでは、1時間目に「並べる」「つなぐ」「積む」をし、2時間目には自由な造形活動をさせた。傘を組み合わせたたり並べたりして形が作られ、作り変えられていった。Aクラスは傘の固まりができていき、最後には授業者の声がけによって短時間で装飾的な形へと変わった。他方、Bクラスは比較的装飾的な傾向から始まったが、次第に具体物を作ろうとするグループと、デコレーションをするグループとに方向性が分かれ、その両方がさらに独自に推し進められていった。どちらのクラスも共にプロセスが重視されたのは確かである。しかし、それでよいのだろうか。

造形遊びは本来、児童の発想による自由な活動として捉えられるが、一クラス30数名いると中学年では、教師が介入せずに子ども達が自ら主体的に一つにまとまるのは、短時間では難しいものである。「形のよさや面白さ」(中学年)、「形のよさや美しさ」(高学年)の感覚を造形遊びでも併せて意識させようとするならば、ばらばらな行為よりも子ども同士の間を繋ぐような、手立ての工夫が必要になってこよう。それには授業が改善されるための3つの視点として、1) 話合いの時間の設定、2) 途中でやるべき目的の共有化、3) 教材(題材構成)の工夫、が挙げられる。

1) は、お互いに場所を共有して造形活動するに当たって、必要となる話合いである。2) は、全体の造形活動がその場所で活かされているかを、途中で確かめる目的の共有化、である。話合いの形態が採られたり、鑑賞を途中でやるなどが考えられる。3) は、題材の目的に向かって、子どもの行為を活性化させ、充

実した造形活動が行われるようにするために必要な、題材構成の工夫である。

高学年になるにつれて、こうした共有の場所においては、とるべき行為の方向性に関して児童が話し合う場面の設定と、同時に教師の介入の仕方が課題となる。それらは今後造形遊びを充実させるための、重要な観点となる。

## V 小2の時と現在の小4の空間把握の違いについて一低・中学年の対比的考察を通して

本児童(4年生)は、2年生の時に同場所で、二等辺三角錐を利用して造形遊びをしている<sup>4)</sup>。その時の活動の様子と対比させながら、本アート空間での把握の違いについて検討したい。

2年生の時は、自分達の作った二等辺三角錐を並べたり、組み合わせてパティオに置いた。パティオの造形的な円形のフォルムに沿って並べたり、コンクリートの段差を活用して設置したり、素材(コンクリート)の厚みに反応した高く積み重ねた形が見られた(図12)。三角錐を立てたり、横に倒して並べる、積み重ねる、部分的に固まりにするなど、こうした造形活動が4年になって材料が傘になっても、同様に引き継がれていることがわかる(図8)。

2年時には彼らの身長から、その目線内で表現した形である。4年生になって、上から見下ろす視点(俯瞰視)が加えられると、同じ場所でありながらも、一段と行動範囲も広くなり、パティオ全体の空間を意識

(表2)

	2年時の造形遊び	4年時の造形遊び
場所	パティオ	パティオ
材料	二等辺三角錐	傘
造形活動	①並べる、つなぐ、積む活動が自然になされる。 ②装飾的に設置された。 ③組み合わせたたり、重ねる。 ④具体的な形ではなく、最後まで抽象的な形の組合せによる造形。	①「並べる、つなぐ、積む」活動を意図的に行わせる。 ②装飾的な意識がはたらく。 ③組み合わせたたり、重ねる。 ④具体的に「テントや部屋」を思いつき、作るグループが現れる。 ⑤中に入りたがる。
空間把握	①部分的	①捉える空間の広がりが増える。 ②周囲の壁にも意識が届くようになる。
造形遊びの特徴	比較的自由に共同作業になりやすい。	子どもの自主的な活動であるため、児童の発想により、活動が個別にいろいろ展開していく。
課題	自然発生的に全体へとつながっていきやすいため、特に課題は見られない。	「みんなで話し合っただけで考えたりしながら」つくるのが、集団での自由な活動ではできづらくなることもある。教師の関わり方が重要で、手立てが必要。



するようになる。また屹立する周囲の窓にも意識が働くようになった。ただし小2の実践では、二等編三角錐の持つ幾何学的なフォルムが、パティオの円形による幾何学的デザインに、形は小さいながらもマッチし、パティオの空間には違和感なく見える。ところが4年生になって、材料に傘を使つての実践では、子ども達もさらに成長して具体物を想像するなど、その物に倣って作り出したり、デコレーションをするグループもあつたりと、様々な形が思い思いに作られることになった。

具体物を表現したり、装飾するために個々に置くだけでは、パティオの場所全体を造形的空間として捉えたとは言えない。それぞれの形が関連し合った、造形的なまとまりが意識された造形活動には至っていないと言えよう。図表にまとめると以下である(表2)。



(図12) 小2の時の造形遊び

## VI おわりに—児童(中学年)の

### アート空間把握の特徴と課題

パティオの場所を通して、小2の時と小4の造形遊びの活動を比較した。中学年になると、一段と造形遊びの実践が、子どもの自由な造形活動を保証しつつも、単なる遊びではなく、意図的な学習として構築されていなければならない難しさに直面する。

造形遊びの材料と場所の関わりについて、活動場所は始めから想定されていたものの、授業実践で当初困難と感じたのは、そこで使用させる材料の選択と題材名の提示法(導入)であった。傘を選択したのは、第一に各自の傘を持参させることで、その量を満たすことができるからである。第二に傘自体の形や色、開閉した時の様々なフォルムの面白さを活かせるからである。造形活動に夢中になると、中学年の児童は想像以上に活発な行動をする。そのため材料としては壊れてもよいものでないと適さず、一般に自然物や生活廃材

がよく使用される意味が、本実践からも再認識されるのである。

また子どもの実態として確認されたのは、中学年の児童は自分達で作った造形物の中に入り込もうとし、生活用具に見立てた造形物と一体となって楽しむ行為である。中学年ではこうした傾向が認められたが、それがより生かされるような造形遊びの材料や、活動の内容を考える必要がある。さらに造形遊びの授業では、活動全体をリードする教師の役割が重要となる。造形遊びの主旨を達成させるためには、教師が子ども達による活動の方向性を見極め、様々な局面において、適宜全員で話し合いをさせ考えさせたりすることに留意する必要がある。そして上学年では造形活動を周囲との関連を意識させながら、行わせることが必要になってくる。

中学年から高学年に上がる程、造形遊びの授業に一層周到な準備が求められるのである。そこに、高学年における造形遊びの実践が難しい、と言われる所以であろう。要領A表現(1)イには「みんなで話し合っただけで考えたりしながらつくること」とあるが、その活動方針が中学年の造形遊びでは一段と意味を持つ。話し合いを授業の中に効果的に取り入れる必要があり、皆で共有しながら考えることの重要性が、いみじくも浮き彫りになった。

造形遊びの無目的性と、造形遊びを最後まで遂行させるために授業を目的化(方向付け)することは別である。教師が造形遊びの授業における目的(方向性)を、子ども全体に話し合わせながら、授業で実現していくことが大切となる。

空間把握については、今回の実践を通して、低学年から中学年になるにつれて一段とそれに広がりが見られた。だが、広い空間を把握することはできるが、個々に造形物を作ったり、装飾したりするのは全体の場所を造形的に活かしているとは言えない。教師が介在しないで、造形表現として空間全体を共有して操作するところまでには至らなかった。この点は、「場所の特徴」を活かすことが求められる高学年に期待される。全体的に空間を捉える視点よりも、中学年では目の前で材料を重ねたり、組み合わせたりして具体物に見立てながら作ることに、未だ興味を示しがちである。一般に低・中学年の子ども達は何かに見立てて作ることが多い。結局、傘の組合せで具体物(テントや部屋)を作ろうとするグループと、空間全体を使って装飾的に表現しようとするグループが、混在して現れた。ただし、壁を使った装飾も見られ、造形活動の対

象としての空間把握が一層広がっていることが確認できた。

今後、高学年の造形遊びの改善に当たっては、材料や場所（環境）の検討に加えて、次の観点からの検討が必要になる。1) 効果的な話し合いの場の設定 2) 活動途中での目的の共有化 3) 目的達成に効果的な教材（題材構成）の工夫、である。

最後に、本稿では中学年による空間把握の実態を捉えるために造形遊びを実施したが、その授業実践を通して常に問題意識としてあったのが、教師の指導すべき点がどこにあるのか、であった。本考察では授業を改善すべき観点が見えてきたにすぎない。造形遊びにおける指導すべき特色（指導的特性）とは何であるのか。この点については、論を改めて考察したいと思う。

## 註

- 1) 2011年に、手つかずの空き地に避難口を整備する目的から塚本悦雄氏のデザインで造られた。本考察では、ここで造形活動する時に、本場所をアート空間と呼ぶ。「パティオ」は略称で、『附属小パティオ みんなの広場』が正式な名称である。この建設の経緯については、「小学校におけるアート空間の創出—弘前大学教育学部附属小学校の試みを通して—」（蝦名敦子・塚本悦雄、「芸術文化」第16号、東北芸術文化学会、pp. 13-22）参照。尚、この場所を使って子どもの空間把握の実態を検討する目的で、一連の考察をしてきている。これまでの授業実践については、次の論考で発表済みである。「アート空間としての活用—弘前大学教育学部附属小学校を事例として—」「美術教育学研究」第46号、大学美術教育学会、pp. 45-52。
- 2) 『小学校学習指導要領解説 図画工作編 平成20年8月』文部科学省、2008、pp. 74-75。〔第1学年及び第2学年〕、〔第3学年及び第4学年〕の2内容A表現(1)ウを参照。
- 3) 造形遊びの活動について、要領解説には全体的な特徴として3点挙げられている。「一つには、材料に進んで働きかけ、表し方を見付けたり試したりするなどの過程を楽しむ活動、二つには、材料を並べたり積んだりするなどの手や体全体を働かせる活動、三つには、材料の形や色を操作したり場所の特徴を生かしたりするなどの構成的な活動である。」（『小学校学習指導要領解説 図画工作編』p. 14）この特徴が、学習指導要領に規定されている中・高学年の文言と対比させると、要領中には中学年「みんなで話し合って考えたりしながらつくること」、高学年「周囲の様子を考え合わせたりしながらつくること」とあり、集団による活動であることが方向づけられている。  
この内容は平成11年度版の改訂から踏襲されているが、それ以前の平成元年度版には高学年での造形遊びはなかった。平成元年度版の〔第4学年〕のA表現(1)の内容から、平成11年度版では高学年にも拡張された形になる。ただしその際に、造形遊びにも「構成」という言葉が盛り込まれた。造形遊びに材料や場所を構成して造形活動することが加わり、高学年にかけて造形遊びの意味が質的に大きく変容している点を、ここで指摘しておかなければならない。
- 4) 蝦名、「アート空間としての活用—弘前大学教育学部附属小学校を事例として—」「美術教育学研究」第46号、大学美術教育学会、pp. 45-52参照。

【付記】本稿は、平成26～28年度科研基盤研究(C)「小学校におけるアート空間に関する研究—材料・場所・空間の問題を中心として—」課題番号26381170の研究成果の一部である。

(2016. 8. 8 受理)